

ホースアシスティッドセラピーによる 発達障害のある児童に対する介入効果の 評価



藤原優美（ふじわら ゆみ）

山口大学共同獣医学部6年生。今後も障がいの有無を問わず、セラピーを必要とするすべての人々に対して、ホースアシスティッドセラピーの活動を広げていきたい。

藤原優美¹、松岡勝彦²、佐々木直樹^{1*}

¹ 山口大学共同獣医学部大動物臨床学研究室 (*nsasaki@yamaguchi-u.ac.jp)

² 山口大学教育学部特別支援教育教室

要約

近年、行動医学分野においてシングルケース実験デザイン (Single Case Experimental Design : SCED) を用いた解析が行われており、対象者の行動変容を数値化し、客観的な達成度を評価する試みが行われている。本研究では、ホースアシスティッドセラピー（馬介在療法）による発達障害のある児童に対する効果を評価するため、シングルケース実験デザインによるデータ解析ならびに統計学的解析を行った。対象者は山口大学馬活動室で開催しているホースアシスティッドセラピー教室に参加した小学生5名を対象とした。また、介在動物はどさん子2頭（2歳、3歳、メス）とした。ホースアシスティッドセラピー教室では餌やり体験、引き馬体験、放牧馬の観察などの馬との触れ合いのほか、餌の準備、ボロ取りなどの作業を実施した。評価方法として、15項目からなる観察項目について評価を行い、シングルケース実験デザインによるデータ解析ならびに一元配置分散分析および反復測定分散分析 (Friedman) を実施した。効果指標PNDによる達成率は84.6%1名、91.6%1名、100%3名であり、5名中4名に非常に大きな変化（とても効果的）が認められた。また、多重比較検定では、対象者の指標得点 (mean \pm S.D.) の初回 (1.2 ± 0.8) に比較して、10回 (6.6 ± 2.3)、11回 (8.2 ± 2.6)、12回 (8.8 ± 2.9)、13回 (9.4 ± 2.7)、14回 (10.0 ± 1.9) および15回 (10.2 ± 1.8) において有意に高値が認められた。以上のことから、本研究では、発達障害のある児童に対するホースアシスティッドセラピーの効果が示された。今後もホースアシスティッドセラピー教室や他団体とのコラボレーション企画を続け、学内外でホースセラピーを提供し

ていきたい。

キーワード：介入効果、発達障害、ホースアシスティッドセラピー

(受付日 2023年4月7日 受理日 2023年6月18日)

研究目的

動物との触れ合いによる効果は古くから知られており、動物介在療法 (Animal Assisted Therapy: AAT) として、広く医療、福祉や教育の現場で用いられている¹⁾。その中で、障害のある人たちに対する馬を用いたホースアシスティッドセラピーの効果が示されているが²⁾、その科学的指標に基づくエビデンスは少ないとされる³⁾。これは、動物が話をしないことに加え、障害のある人たちに関する評価を表現しづらいことに由来する。近年、行動医学分野においてシングルケース実験デザインを用いた解析が行われており、対象者の行動変容を数値化し、客観的な達成度を評価する試みが行われている⁴⁻⁶⁾。

そこで、本研究では、ホースアシスティッドセラピー（馬介在療法）による発達障害のある児童に対する効果を評価するため、シングルケース実験デザインによるデータ解析ならびに統計学的解析を行った。

材料・方法

期間は2021年4月～2022年11月（夏季、冬季ならびに春季繁忙期除く、月1回）であり、対象者は期間中に山口大学馬活動室で開催しているホースアシスティッドセラピー教室に参加した小学生5名（男子）とした。事前に目的、意義、実施方法などについて説明して、アンケートの同意を得た。また、介在動物は山

口大学馬活動室にて飼養されているどさん子2頭（2歳、3歳、メス）とした。

ホースアシスティッドセラピー教室ではRDAJapanインストラクターの指導のもと、餌やり体験、引き馬体験、放牧馬の観察などの馬との触れ合いを実施した。その他、餌の準備、ボロ取りなどの作業など大きく分けて2つの異なる体験について、それぞれの生

徒に合ったスケジュールを立てて実施した。積極的な生徒から馬に触れるまで時間がかかる生徒までいるため、児童1名に対しサポーターとして学生1名と教員1名が付き活動を行った。なお、活動中の事故や怪我を防ぐために、児童にとって視覚でわかりやすいスケジュールや注意事項の提示を行った（図1、2）。

評価方法として、15項目からなる観察項目（表1）



図1. ホースアシスティッドセラピー教室の活動内容



図2. ホースアシスティッドセラピー教室活動前の注意事項
注意事項も視覚で伝えることで自閉症などの生徒にも理解しやすい工夫をしている

表1. ホースアシスティッドセラピー教室における観察項目

観察項目	観察内容
1	動物の動きに反応して感情表出がある（驚く、微笑む、顔の表情に変化がある）
2	動物の動きに対して思わず声が出る、声を出して笑う、発声がある
3	動物の行動を言語化する（独語でもよい）
4	動物の気持ちを想像して代弁する（独語でもよい）
5	動物に対して自分本位でない関わりができる（自ら近づいて来るまで待つ）
6	動物との距離が前回より縮まる（自ら触る、道具を使って誘導する）
7	動物といふと心が落ち着いている
8	スタッフの指示にしたがって開始と終了ができる
9	順番を守って行動できる
10	スタッフと目を合わせることを拒まなくなる
11	動物の行動についてスタッフと共有する（スタッフと顔を見合わせる）
12	動物の行動を言語化して自らスタッフに伝える、スタッフに質問する
13	目の前の動物の話だけでなく自分自身の話をする
14	スタッフに自分の意志を表明できる
15	スタッフと会話のキャッチボールがある

について評価を行った。なお、評価項目として一般に自発的に行動変容が生じる際に観察される行動指標を参考に 15 項目抽出し、観察項目とした⁸⁾。観察項目のうち、項目 1~7 は動物に対する行動、項目 8~15 は人に対する行動を観察している。まず、シングルケース実験デザインによるデータ解析として、初回から 3 回までを初回面談、施設見学などをベースラインフェイズ (Baseline phase) として設定し、介入セッションを開始した 4 回から 15 回目までを介入フェイズ (Intervention phase) とした。15 項目の観察項目について各 1 点として、発現項目数を加算して指標得点 (response) とした。介入フェイズ (4~15) のうち、指標得点がベースラインフェイズの最も高い指標得点を上回ったセッション数 (session) をカウントし、介入フェイズで割った値を効果指標 (Percentage of Nonoverlap Date: PND) とした。効果指標 PND の解釈基準^{4,7)}により、効果量 50% 未満で「小さな変化 (効果が無い)」、50 以上 70% 未満で「過度な変化 (効果が疑わしい)」、70 以上 90% 未満で「大きな変化 (とても効果的)」、90% 以上で「非常に大きな変化 (とても効果的)」として評価した。

また、統計解析として対象者の指標得点 (response) を平均値 \pm 標準偏差 (mean \pm S.D.) で示し、初回から

15 回までのフェイズにおいて一元配置分散分析 (one way ANOVA) で全体の有意性を調べ、有意差が認められた場合には反復測定分散分析 (Friedman) を実施した。有意水準 5% 未満を有意差ありとみなした。

結果

参加者は自閉スペクトラム症等の発達障害を有しており、多動であったり、耳塞ぎ等の聴覚過敏と判断されるような行動特徴があった。また、参加者には馬やスタッフとの接触に戸惑う場面が見られたが、機会を増すごとに馬や人にも慣れ、馬との距離が縮まってブラッシングや餌やりなどに積極的な参加や、スタッフに自分の意志を表すなどの行動変容がみられた。さらに、介入フェイズ後半 (14 回、15 回) では、5 名中 5 名が、動物の行動についてスタッフと共有する、スタッフに自分の意志を表明できる、スタッフと会話のキャッチボールがある、のいずれかを達成することができた。

シングルケース実験デザインによるデータ解析では、初回から 3 回 (初回面談、施設見学など) をベースラインフェイズとしたが、指標得点 (response) は最高 4 ならびに最低 0 であった (図 3)。介入フェイズに移行してから、指標得点は徐々に増加し、最終 15 回には最

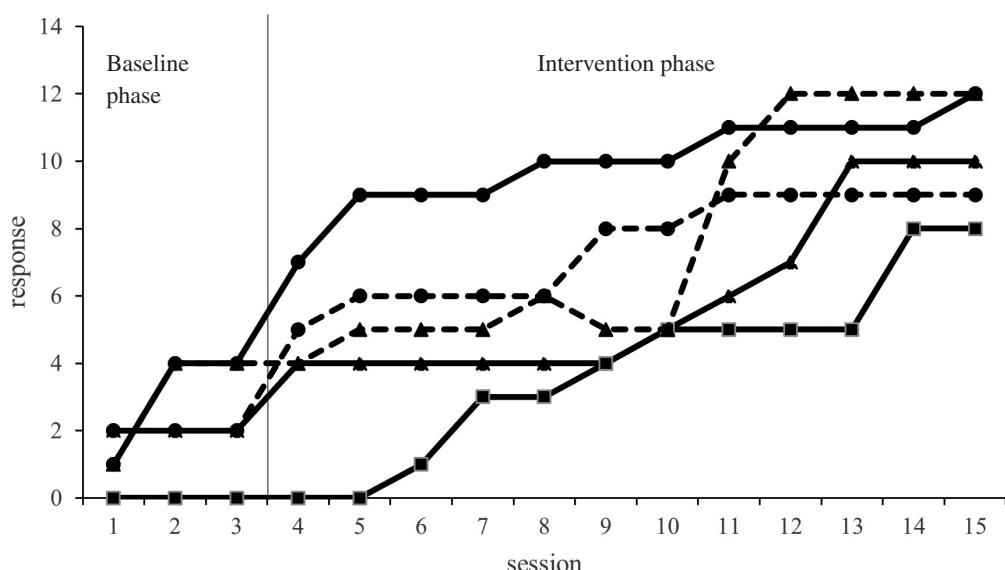


図 3. ホースアシスティッドセラピーにおけるシングルケース実験デザインによるデータ解析
初回から 3 回までをベースラインフェイズ (Baseline phase) とし、介入セッションを開始した 4 回から介入フェイズ (Intervention phase) とした。Session 3 と 4 の間に基準変更線がある。

● : 児童 1 ▲ : 児童 2 ■ : 児童 3 ●▲ : 児童 4 ▲■ : 児童 5

高12ならびに最低8と高値を示した。効果指標PNDによる達成率は84.6%1名, 91.6%1名, 100%3名であり, 5名中4名に非常に大きな変化(とても効果的)が認められた。

また, 対象者の指標得点(response, mean \pm S.D.)の統計解析では, 初回(1.2 ± 0.8)に比較して, 10回(6.6 ± 2.3), 11回(8.2 ± 2.6), 12回(8.8 ± 2.9), 13回(9.4 ± 2.7), 14回(10.0 ± 1.9)および15回(10.2 ± 1.8)において有意に高値が認められた(図4, $P < 0.05-0.01$)。

考察

本研究は発達障害のある児童に対してホースアシステッドセラピー(馬介在療法)による行動変容の効果を評価することを目的として実施した。参加者は自閉スペクトラム症等の発達障害を有しており, はじめての場所や人とのかかわりを苦手とする傾向が見られた。活動に慣れるまでは, 見学から参加してもらい, 本格的な参加は本人の意思で決定した。

評価項目として一般に自発的に行行動変容が生じる際に観察される行動指標を参考に15項目抽出し, 観察項目とした⁸⁾。観察項目のうち, 項目1~7は動物に対する行動と, 項目8~15は人に対する行動を観察している。一般に行動医学分野では, 対象群を設定しない症例報告では, 従属変数(Y)に影響を及ぼす独立変数

(X)を特定するための研究デザインはシングルケース実験デザインとして患者中心のアウトカム研究が用いられている^{4,9,10)}。シングルケース実験デザインでは, ベースラインフェイズと介入フェイズのデータをグラフ化し, 基準変更線の左右でデータの差異を視覚的に判断する方法(目視分析)が用いられ, 目視分析の判断基準が提唱されている¹⁰⁾。また, その効果指標であるPercentage of Nonoverlap Date(PND)は, 介入フェイズのデータポイント数のうち, ベースラインフェイズと重複しないデータポイントの割合によって効果を示す指標であり, 効果の判断基準が示されている^{5,11)}。本研究では, 発達障害のある児童に対するホースアシステッドセラピーの効果が示されたが, 介入早期に効果が現れたケースとそうでないケースがみられた。介入早期に効果が表れた児童は, 比較的好奇心旺盛な児童であったのに対し, 介入後効果が表れるまでに時間を要した児童は聴覚過敏のある児童であり, 周囲の環境に慣れるまで時間を要したものと推察された。

一方, この判断基準では, 初回のベースラインフェイズから高い指標得点(response)を示す場合には, その効果を示すことができないという問題点が指摘されており¹²⁾, 本研究では一元配置分散分析(one way ANOVA)と多重比較検定による統計学的解析を合わせて実施した。その結果, 介在フェイズ後半の10~15回において有意な指標得点(response)が示され, 改めて

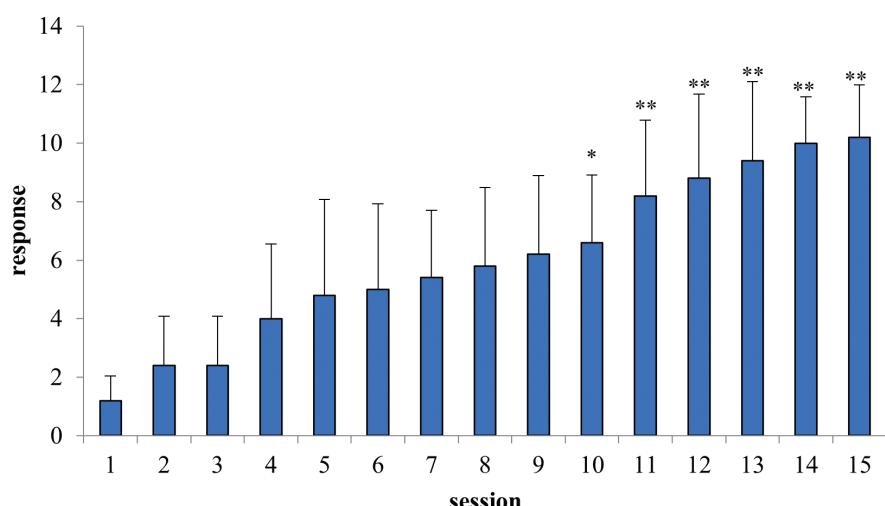


図4. ホースアシステッドセラピーによる指標得点(response)の変化
数値は平均値 \pm 標準偏差(mean \pm S.D.)で示した。初回(Session 1)に対する有意差を示す。* : $P < 0.05$, ** : $P < 0.01$ 。

ホースアシステッドセラピーの行動変容にもたらす効果が証明された。

今回のホースアシステッドセラピーでは、参加者の児童に多くの行動変容が見られたが、最終的に馬を介して対人コミュニケーション能力の向上が見られた。これは馬を介した心の癒し効果が、自然と精神的な安定をもたらし、他者との接触のハードルの閾値を下げていると推察された。馬は人との距離を知っている動物とも言われ²⁾、対人コミュニケーションの苦手な人間においても、近寄らなければならないという負担感を与えることが少ないと考えられる。

本研究では、発達障害のある児童に対するホースアシステッドセラピーの効果が示された。今後もホースアシステッドセラピー教室や他団体とのコラボレーション企画を続け、学内外でホースセラピーを提供していきたい。また、セラピー対象者としては障がいの有無を問わず、セラピーを必要とするすべての人々に届けられるよう活動を広げていきたい。

謝辞 本研究は下記の山口大学ホースヒーリングサークルの部員の協力により実施されました。熊谷駿太（共獣卒）、齋藤理沙（共獣B6年）、國貞宥妃（共獣B5年）、中山紗希（教育B5年）、外川智周（共獣B4年）、斯波はるか（国際B3年）、原田茉咲（理学B3年）、大前愛（教育B2年）、秋山美桜菜（人文B2年）、小林静梨（人文B2年）、中川康平（人文B2年）、長尾健太郎（人文B2年）、西坂雄（人文B2年）、前田桃花（農学B2年）、吉村大楠（農学B2年）、井上和（共獣B2年）、上野翼（共獣B2年）、藤尾幹（共獣B2年）、藤野笑麻（共獣B2年）、田中萌愛（共獣B2年）、中村流佳（共獣B2年）、奥村竣（工学B2年）、村田英生（工学B2年）

引用文献

- 1) 岩田恵理、澤田明子. 2019. イヌの自主性に配慮した動物介在活動とその評価. *Animal Behaviour and Management*, 55: 154-164.
- 2) Sharon W and Gretchen V. 2016. Conversations with Horses in Their Language. Trafalgar Square. P1-5. In: Horse Speak. Conversations with Horses in Their Language. (Sharon, W. ed.), Trafalgar Square, North Pomfret.
- 3) 草野信一. 2011. 乗馬と在来馬の価値. pp. 1-2. In: 乗馬の楽しみとホースセラピー. 畜産の研究編集部（編著）, 養賢堂, 東京.
- 4) 古川洋和. 2020. シングルケース実験デザインのデータ解析. *行動医学研究*, 25: 182-188.
- 5) 山田剛史. 2020. 単一事例データのための統計的方法について—効果量を中心に—. *高齢者のケアと行動科学*, 25: 35-55.
- 6) 竹林由武. 2021. シングルケース実験デザインにおける介入効果の評価. *心身医*, 61: 708-714.
- 7) Scruggs TE, Mastropieri MA and Casto G. 1987. The quantitative synthesis of single-subject research. *Remedial and Special Education*, 8: 24-43.
- 8) 松澤淑美、續木奏. 2023. 動物介在療法による不登校児童生徒への支援. *日獣会誌*, 76: 28-36.
- 9) Smith JD. 2012. Single-case experimental designs: a systematic review of published research and current standards. *Psychol Methods*, 17: 1037.
- 10) Shaffer JA, Kronish IM, Falzon L, et al. 2018. N-of-1 randomized intervention trials in health psychology: a systematic review and methodology critique. *Ann Behav Med*, 52: 731-742.
- 11) Scruggs TA, Mastropieri MA and Casto G. 1987. Quantitative synthesis of single subject research: methodology and validation. *Remedial Spec Edu*, 8: 33.
- 12) Parker RI, Hagan-Burke S and Vannest K. 2007. Percent of all non-overlapping data (PAND). An alternative to PND. *J Spec Educ*, 40: 194-204.

馬事往来

馬の大型絵画を通じた、 日英間の馬文化交流

三宅洋子



三宅洋子（みやけ ようこ）

東京都生まれ。蹄跡代表。一般企業での勤務を経て、馬に関する仕事を希望し乗馬用品店に就職。北海道の馬産や育成、海外での馬術イベントや芸術などの馬文化を学ぶ。国内において2017年から4年間、都市部での馬のイベント執行に携わり、2019年からの2年間は仮設馬場の運営にあたる。退職後、世界と日本の馬事文化の交流を目的として活動をしている。

馬の絵画を通じた文化交流

2023年4月24日、日本の馬の肖像画を描く画家、長瀬智之氏の作品（図1）が、はるばる海を渡り、作品のモデルである Household Cavalry Mounted Regiment (HCMR, 王室騎兵連隊) に寄贈された。王室騎兵連隊によると、今回の寄贈は英国外と民間と初めての交流、かつ貴重な機会である故、大歓迎された。

寄贈まで国内外において、さまざまな試行錯誤や調整を繰り返しての取り組みとなつたが、寄贈当日は馬を介し共通の認識を持つ者同士、垣根はなく、国や所属を超えた連帯感すら生まれ、無事、寄贈を執り行うことが出来た。

寄贈された作品は、去る2022年、公益財団法人馬事文化財団が運営する東京競馬場内のJRA競馬博物館で4月から8月まで、特別展として「長瀬智之展・肖像画に生きる永遠の名馬たち」の開催に伴い、イベントホールで行われたライブペイントで制作されたもの。

JRA競馬博物館内のホールで制作工程を一般客に公開しながら、期間中に毎日、大型作品を描くケースは極めて稀なケースで、多くの注目を集めた。

この作品が英国へ渡るまでの経緯と、現地における寄贈の様子を伝える。

ライブペイントとは

広く一般では、イラストレーターや書家によるライブペイントはあるものの、油彩画のライブペイントは非常に珍しい。まずキャンバスに下地を塗り、その上から幾重にも油彩絵具を重ねる、極めて時間のかかる仕事だからだ。馬の画家では日本初の試みである。

来館者は、普段見ることはできない、画家が油彩画を描く姿を、ライブでごく近くで鑑賞できた。一方、画家は、衆人環視の中で描くというプレッシャーを感じる以上に、ライブペイントの意義に並々ならぬ熱意を抱いていた。「自分がこの場で実際に油彩画を描いて



図1. 作品タイトル：《暁光》～The Light of Dawn～

サイズ：縦1,800 cm × 横5,500 cm 油彩画（Oil Painting）支持体：キャンバス 額装：金色アルミフレーム

いる姿を公開することで、このように馬が描けるものなのだ、私もいつか馬の絵を描いてみたい、と誰かに感じてもらえたならば、それが今後の日本の馬事文化の発展につながっていくはずだ」という強い信念が、画家を奮起させていた。

その題材は、ほかならぬ王室騎兵連隊。2008年、自身が初めて連隊の馬に出逢い、帰国の途についたヒースロー空港で、突如「降りてきた」構図。それは「周囲がまだほの暗い中で、等身大の連隊の馬達が織りなす厳かな隊列」であったという。

この特別展「長瀬智之展・肖像画に生きる永遠の名馬たち」は、コロナ禍で当初の予定から3回ほどの延期を繰り返していた。馬事文化財団関係者の粘り強い取り組みにより、2022年春の開催が無事決定されたが、開催が延期されるたびに特別展の展示スペースの変更が余儀なくされた。それが功を奏し、2022年にはJRA競馬博物館のイベントホールの使用許可が下りた。普段は観覧客を入れ、トークショーや公開録画も行われるほどの非常に広いホールである。そのような広いホールを使えるのならば、展示だけでなく何か特別なことをお見せしたいと検討を重ねた結果、前述の等身大に近いサイズの彼らを描くライブペイントの実行に繋がったのだった。

特別展の開催期間中は、来館客の安全を考慮し、キャンバス周辺には結界が張られたが、毎日画家が約600号相当という大きなキャンバスに向かい黙々と筆を走らせる姿は、多くの来館者の注目を集めることになった。日々作品が出来上がっていく様子が興味深く、毎週末、ライブペイントの進捗を記録撮影し、鑑賞を楽しむ来館客もいたほどだ。

この巨大な作品には、何万もの筆が入っていて、加筆と乾燥を何度も繰り返し、ようやく馬の重厚感や皮膚感、馬体の奥行などが表現できたのだという。

そして約4か月間の制作期間を経て、2022年8月、ようやく巨大な作品が完成に至る。完成披露会も開催され、JRA競馬博物館での一般へのお披露目を経た後、作品の保護と補強を目的としてアルミ製の額装が施された。

英国の王室騎兵連隊が闊歩する静かな夜明け、そして、絵画を通じた日英の文化交流の幕開けをイメージして描かれたその作品は、《暁光》～The Light of Dawn～と名付けられた。

寄贈までの道のり

寄贈先の選定は困難を極めた。作品の英国寄贈は、「馬の絵画を通じて日英の文化交流に尽力したい」といった画家の念願によるものであったが、2022年9月エリザベス女王IIが崩御。英国とは連絡が取りにくい環境が続いた。国内外の様々な可能性や数々の関係先を当たったものの、作品の最大の魅力であり、かつ最大の特徴でもあるその巨大さが、逆にボトルネックとなってしまう。当初話が進んでいた展示場や、ロンドン市内のアートギャラリーへは搬入さえも難しく、また他の展示スペースの確保も極めて困難との判断になり、寄贈プランは、一度暗礁に乗り上げた。

この困難から我々を救ってくれたのは、世界三大ホースショーの一つであるオリンピア・ホース・ショー（英国・ロンドン）における出展経験であった。2度目の出展となる2019年、エキシビション・マネージャーであるパム・スウィフト女史が、当時、日本からの唯一の出展者であった私共を大変懇意にしてくださり、ポニー競馬では馬場内に入場させてくれ、また王立騎兵連隊が演じるミュージカル・ライドというショーの演目を坪沿いで鑑賞させてくれたりと、特別な招待をしてくれたのだった。

ミュージカル・ライドの演目は、日常ロンドン市内で儀仗を行う厳かな隊列の雰囲気とは全く異なる。音楽や照明のたかれた華やかな会場で歓声に動じず、懸命に演技する馬の呼吸音、馬具の装飾金具が鳴る音、躍動する馬の蹄音、弾ける馬場砂を、画家は誰よりも近くで感じた。画家は、女史の厚意に痛く感激し、馬達の姿を目に焼き付け、その感動を心に刻んだ。それ以来、ヒースローで見た構図がますますリアルになり、画家を一層、制作にかり立てた。

2022年11月、筆者から彼女に完成した《暁光》の画像を添付し、画家の最近の活動報告をした。すると実は、彼女の祖父は作品のモデルである王立騎兵連隊の教官であったことを聞く。この縁に恵まれ、作品のモデルとなる王立騎兵連隊の、ジャイルズ・スティッペ近衛騎兵財団理事、およびトーマス・アーミテージ中佐と直接繋がることが出来た。

早速、筆者から中佐に、この作品の制作経緯、仕上り画像、額装やサイズ等の仕様、そしてなにより絵画を通じた日英の馬事文化交流という作品寄贈の目的を伝え、また日本から現地までは繊細な油彩画ゆえ温温



図2. ジェレミー大尉ほかブルーズ・アンド・ロイヤルズ隊員（騎馬隊）と、JRA ロンドン事務所草野所長、日本側関係者

度管理ができるリーファーコンテナを使用するといった安全な運送方法についても言及した。

トーマス中佐は、作品のインパクトやクオリティに加え、画家の「馬」への強い想いとそのチャレンジ精神、それをサポートする今回の文化交流に対する支援制を強く賛辞された。

そして、英国の王立騎兵連隊に、作品を寄贈することが決定したのだった。

寄贈レポート

2023年4月24日、ロンドン・ハイドパークの英国王室騎兵連隊において、JRA ロンドン事務所所長草野様・主査大野様のサポートの元、日本から長瀬智之氏・伊藤和彦氏（輸入コンサルおよび現地作業補佐・株式会社グランドフリート代表）・福富朗氏（運輸担当・株式会社横浜海陸商会）・三宅洋子（蹄跡代表）が赴き、寄贈の立合いを行った（図2、3）。

当日は、チャールズⅢの戴冠式の直前であったにもかかわらず、王室騎兵連隊は我々を快く招き入れてくれた。多くの隊員から「日本から絵画がプレゼントされることを聞いているよ」と気さくに声をかけられ、連隊にとってこの企画が大変珍しいことを、改めて思い知る。

また当日は、特別に厩舎や装蹄所、馬具庫や衣装庫を案内していただけただけでなく、今回の寄贈と訪問を歓迎され、20名程の幹部と昼食会も開催された。会



図3. 右: トーマス・アーミテージ中佐 左: 長瀬智之氏
英国王室騎兵連隊 トーマス・アーミテージ中佐からのコメント
「このような素晴らしい絵画を寄贈いただき、長瀬画伯には心より感謝申し上げます。我々にとどても英国外の民間の方々とこのようなイベントを執り行うことができたのは初めての経験で大変嬉しく思います。また、このような取り組みが、日英両国のさらなる馬事文化交流につながることを願っております。年内のどこかで正式な式典（除幕式）を企画したいと考えています。その際は、今回の活動をサポートされたお仲間と共にぜひご列席ください。」

食にはフランス陸軍の幹部も招待されており、馬が他国軍隊との交流に役立っていることを実感した。

イギリスの馬文化、王室騎兵連隊とは

王室騎兵連隊は、英国陸軍の2つの最上級連隊、赤い制服のライフガーズと、黒い制服のブルーズ・アン

ド・ロイヤルズで構成されており、この2つの連隊が、毎日交代で市内の儀仗を務めている。儀仗を担当する連隊は毎朝、王室騎兵連隊にて、馬装点検・馬上点呼を行う。その後、約3.2km先へのホース・ガーズ・パレードまで、約20分かけてパレードを行い、朝11時から別の隊と交換式を行う。このホース・ガーズ・パレードでの交換式の様子は一般公開されており、観光名所ともなっている。バッキンガム宮殿での衛兵交代式と共に、ロンドン観光で目にした人も多いのではないだろうか。

なお、今回の寄贈作品“*The Light of Dawn*”のモデルとなるのは、黒い制服のブルーズ・アンド・ロイヤルズであるが、その長は、今回のチャールズⅢの戴冠式で、王族で唯一馬に騎乗した、アン王女である。アン王女は、戴冠式前日に厩舎を訪れ実際に騎乗する馬に会い、また戴冠式では、国王の馬車に従い、約6,000人の隊列を率い軍服でパレードを行ったことも記憶に新しい。

総括

競走馬の肖像画の文化は、一説には英国発祥のものといわれている。写真機がない時代、偉大な功績をおさめた馬の栄誉を称え、その雄姿を後世に遺すことを目的とした馬主が、画家に制作を依頼したことが起源らしい。1点は自分の手元に置き、もう1点はジョッキークラブに寄贈すること。それが、英国ジョッキークラブ会員としての最高の名誉とされたといわれる。

英国王室騎兵連隊として、英国外の民間との交流は初の試みとなったが、今回の日英馬事文化交流事業における大きな収穫の一つとして、日本でも競走馬または馬の雄姿を絵画で遺そうとする文化があることを、英国の関係者に認知してもらえたことが挙げられる。

英国で馬の絵画と言えば、ジョージ・スタッブスやアルフレッド・マニングスなど著名な作家が数多く存在する。

また、英国において日本の競走馬の知名度は極めて高い。世界の主要なレースに出ていた日本の馬の名前を言えば、ほとんどのホースマンは知っている。日本の競走馬が世界の舞台で活躍していることを改めて実感した。

一方、日本で馬の肖像画を描いている画家がいる、またそのように絵画で馬の姿を残すといった馬事文化の継承があるということは、残念ながらあまり知られていない。

今回関係者が現地に赴き、現場で交流をもつことで、日本でも馬専門の画家として油彩画を制作し、それを日英の文化交流に役立てようと活動していること、またそれを支援する馬事文化の普及への取り組みを、深く理解してもらえたのではないだろうか。

競走馬の肖像画を通じて、また今回寄贈した絵画《曙光》を通じて、英国が日本を自国に共通する文化を持つ国として認識してくれることを切に願う。

また、これを機に日英の馬事文化の交流が継続し、発展させていくことが、日本においても、馬とのより幸せな世界の実現や広がりに繋がるはずだ。

今回の寄贈に関しては、粘り強く特別展の開催に尽力してくださった公益財団法人馬事文化財団関係者様、英国と幾多の調整をしてくださったJRA国際部様、また現地においてはJRAロンドン事務所所長草野様をはじめとし、大変多くの皆様から励ましやご支援のお気持ちを頂戴し、多岐に渡り多大なご協力ご尽力を賜りました。皆様のご厚情に改めて深く感謝申し上げます。

今回を貴重な一つの契機として、皆様から頂戴したご支援に更にお応えできるよう、今後もご協力を賜りながら、日英の馬事文化交流を継続していくことが重要だと強く感じている。

最後に、この度、公益社団法人全国乗馬俱楽部振興協会の支援事業を通じ、JRAの特別振興資金事業を受け、寄贈が滞りなく執り行うことが出来ましたことに、心から御礼を申し上げます。

—画家プロフィール—

長瀬智之（1961年生まれ）は、同志社大学ラグビー部で大学選手権3連覇を達成したメンバーの一員として大学生活を送ったのち、イラストレーターとして就職。その後、シンザンに会ったことをきっかけに馬専門の油彩画家としての道を進む。2019年にロードカナロア、2021年にキタサンブラックの顕彰馬肖像画をJRA競馬博物館に納める。また、近年の競走馬では、アーモンドアイ、コントレイル、クロノジェネシス、リスグラシュー、グランアレグリア、ラヴズオシリーユなど数々の名馬の肖像画を手がけている。2023年12月、自身3度目となるロンドン・インターナショナル・ホースショーの出展を予定している。

ウラジオストク日露大競馬会, 1909年(3)

立川健治



立川健治 (たちかわ けんじ)

1950年佐賀県生まれ、京都大学文学部卒業。富山大学名誉教授。競馬史の著作として『文明開化に馬券は舞う』(2008年、2009年度JRA賞馬事文化賞)、『地方競馬の戦後史』(2012年)、『馬券默許時代』第一部(2023年12月刊行予定、3書ともに世織書房)。現在、日本近代競馬史研究に従事、メールマガジン「もきち俱楽部」(週刊)で日露戦後から明治末年までの競馬史を「馬券默許時代」と題して連載中。

ウラジオストク日露大競馬会は、1909(明治42)年、9月5日(日)、8日(水)、12日(日)、15日(水)、18日(土)、19日(日)の開催を迎えた。開催執務委員は11名、ロシア側が委員長を含め8名、日本側委員は、シー・ダウンがハンデキャップ作成係、神崎利木藏(明治10年代から30年代にかけて横浜・根岸競馬場で活躍した騎手)が審判係、京浜競馬俱楽部(川崎競馬場)関係者1名が検量掛¹⁾。

コースは、1周約1,600メートル、幅員15間(約27.3メートル)、平坦、左回り、場内からのコースの「展望頗る便利」だった。スタンドは10数年前の建築、「鳴尾に比し馬見所は稍々劣れるの觀」があったという²⁾。

馬券は1枚10ルーブル、単勝式と2着までの複勝式、そしてガラの3種類を発売³⁾。複勝式は、前年7月東京ジョッキー倶楽部(板橋競馬場)第2回開催の際、導入が計画されたが、結局馬政局の反対で実現しなかったので、日本から来たものにとっては初体験、購入したのはロシア人が多かった。控除率は、計画当初は1割だったが、協議の結果1割5分となり、7分5厘(7.5%)ずつ等分にウラジオストク側とシー・ダウン側に分割することになった⁴⁾。控除率、配分が引き上げられたのは、シー・ダウン側も、賞金等の開催費用の半分を負担するという条件でのものだったと思われる。そして、かつて横浜・根岸競馬場で盛んであり、東京競馬会(池上競馬場)でも明治39年11月第1回開催で発売され、その後、馬匹鑑定とは無縁の賭博と禁止されたガラも発売された。日本でのガラは、通例、1番から20番の番号が記された札を1セット20枚、控除率1割、複数セットで売り出す方式。出走馬が確定すると、出走馬の登録番号(馬番号)に照応する札が決定され、この時点では出走してこない馬の番号は無効、レース後、1、2着馬の札に対して、1セット

の売上額の6割、3割を払い戻すものだった。たとえば1枚10円だと、配当は1着馬120円、2着馬60円。おそらくウラジオストクもこれに類似したものだったと思われる。これに加えて、このガラを前夜に売り出し走予定馬と番号を対応させ、その札をオークションにかける方式も行われた。安田伊左衛門は、このウラジオストク競馬でのオークションをつぎのように回想している⁵⁾。

露西亞人は、予て個人個人としては非常に無邪気でつき合易く、面白いということを聞いて居ったが、夜は商業会議所に集って、日本人と翌日の馬のオクションを楽しんだのである。それは如何にも楽しそうに、始まる前まではトランプを闘わし、如何にも無邪気に面白そうに遊んだのであった。

レースのカテゴリーは、「トロチング(繫駕レース)」を除いて、日本調教馬単独で実施されたのが各抽籤内国産馬、内国産馬、各抽籤豪州産馬の4つ、日本調教馬とロシア調教馬の混合が、各産馬(日本調教の外国産馬とロシア調教のサラブレッド、アラブなど)、各抽籤豪州産馬とロシア産馬、内国産馬とシベリア産馬の3つ。なお各は、日本の各競馬会、競馬倶楽部の意。優勝戦は、各抽籤内国産馬、内国産馬とシベリア産馬、各抽籤豪州産馬とロシア産馬、各産馬の4つにカテゴライズして実施された。

賞金は、例えば初日、各産馬が350ルーブル、つぎにロシア産馬と日本調教馬の2つの混合戦が同額で250ルーブル、各抽籤内国産馬200ルーブル、6日目の優勝戦では各産馬650ルーブル、各抽籤豪州産馬およびロシア産馬が500ルーブル、内国産馬とシベリア産馬が450ルーブル、各抽籤内国産馬が300ルーブルだっ

た。このように賞金は、各産馬が一番高く、ついで混合戦、抽籤内国産馬の順。総賞金2万2,335ルーブル。なお、当時1ルーブルは1,032円⁶⁾だった。ウラジオストクは6日間だったので、それぞれに開催日数にあわせて単純換算して比較すると、この賞金額は、馬券発売が禁止された後のこの春の日本レース俱楽部（横浜・根岸競馬場）の4日間1万8,600円を下回り、日本競馬会（目黒競馬場）3日間で8,980円を上回っていたが、黙許時代の前年春の日本レース俱楽部の4日間2万6,290円の6割以下、日本競馬会4日間の4万8,400円の3割程度だった。この賞金に加えて馬券の「売上百分の2分5厘を1, 2, 3着に分配」することにも合意していたが⁷⁾、実行されたかどうかは不詳。

以下、各開催日の概況を述べ、レースに関しては、毎日第5レースに実施された「トロチング競走（繫駕速歩競走）」を別にして、各レースの勝馬、勝時計等が日本の新聞に報じられたが（ただし2日目は一部）、紙幅の関係で6日目の優勝戦を中心に紹介する。

初日の5日の入場者は約2,000人あるいは4,000人、その内ウラジオストク在住も含めて日本人は500余人⁸⁾。ロシア人たちのなかで目立っていたのは夫人を連れた陸海軍の将校たちの姿であった。入場料は1等2ルーブル、2等1ルーブル、3等50コペイカ、馬券発売は1, 2等の観客に限り、3等入場者には発売しなかった。日本人は単勝、ロシア人は複勝を買う者が多く、ロシアの馬が勝つとロシア人側から、日本の馬が勝つと日本人側から拍手が起こったという。日本調教馬単独のレースを別として、日本調教馬とロシア産馬混合6レース中を日本側が5勝をあげた。この日の売上は5万ルーブルあるいは6万円。いずれにしても、明治41年春のシーズン、4日間で200万円を超えて

いた東京競馬会（池上競馬場）、東京ジョッキー俱楽部（板橋競馬場）、鳴尾速歩競馬会（鳴尾東浜競馬場）の1レース分か2レース分の数字にしか過ぎなかった。劈頭の第1レース各抽籤内国産馬戦、全くの人気薄の馬が勝って923円50銭の大波乱になった（図1）。なお配当金の単位はルーブルだったはずだが、日本側の資料では円なのでそれにしたがっておく。

2日目の8日の成績が判明するのは3レース、その内の1つが各産馬だったが、日本調教馬が1, 2着を占め、単勝の配当18円に対し、2着馬の複勝が42円50銭だった⁹⁾。

3日目の12日は日曜日、入場者2,000余人、馬券売上3万余円¹⁰⁾。ロシア調教馬との混合6レース中日本側が4勝。ちなみに、この3日目までに日本からの遠征客で馬券で損をしたものが多く、「致命傷を受けた」50余人が、ウラジオストック・敦賀間の定期船で、4日目当日の15日にも20余人、4日目終了翌々日の17日にも20余人が帰国したという¹¹⁾。ウラジオストク競馬会の馬券が難しいことを示していたが、これを取戻そうとすると傷が広がるのが通例である。日本からの遠征客は約300人だったと思われるから、3日目までに3分1近くが帰国してしまったことになる。

4日目の15日の入場者は、水曜日に加えて、ハルビンなどから観戦に訪れていたロシアの軍人たちが帰ったのだろう、僅か500人に減った¹²⁾。ロシア調教馬との日本調教馬混合5レースの内ロシア側が4勝、初めてロシア側が過半数を上回った。

5日目の18日、入場者は4日目よりさらに減少して300人¹³⁾。4日目もそうだったが、各馬の発売枚数によってオッズが決まるパリミチュエル方式の馬券がとともに機能するのには少なすぎる人数だった。この日、

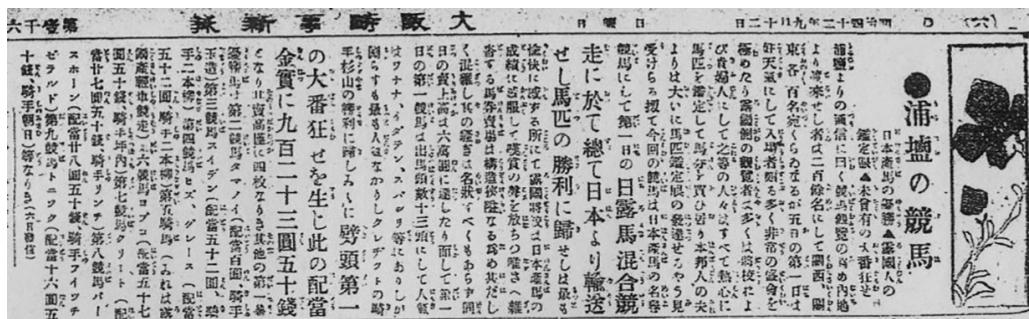


図1. 「浦鹽の競馬」『大阪時事新報』（明治 42 年 9 月 12 日）

ロシア調教馬との混合6レースのすべてを日本調教馬が勝った。

6日目の19日、この日は日曜日、最終日で優勝戦も行われることもあって、入場者は1,000余人と、初日、2日目には及ばなかったが、4日目500人、5日目300人からは盛り返した¹⁴⁾。

第1レース各抽籤日本産馬優勝ハンデキャップ競走、1マイル8分1、1着300ルーブル、勝ったのはカチクモ。勝時計2分7秒、1馬身差の2着スバシリ、2分1馬身差の3着ルゴルワ、3頭のハンデは、141斤（約64.0kg）、130斤（約59.0kg）、148斤（約67.2kg）。カチクモは、4日目第1レースに続く勝利。同馬は、日本競馬会（目黒競馬場）明治41年春季抽籤馬、同開催の新馬優勝戦を制し、12月の日本競馬会、東京競馬会（池上競馬場）、東京ジョッキー倶楽部（板橋競馬場）の各秋季開催でも勝鞍をあげ、この6月の日本競馬会春季開催では抽籤馬の優勝戦を勝っての遠征、力通りの勝利だった、多くの活躍馬を所有した横浜の実業家若尾幾太郎、仮定名称ネギシの名義。

第2、第3、第4、第6は開催未勝利馬戦、第7レース以下が各カテゴリーの優勝戦だった。

まず第7レース各日本産馬およびシベリア産馬優勝ハンデキャップ競走、1マイル4分1、1着450ルーブ

ル、勝ったのはスイテン、勝時計2分18秒（図2）。1馬身差の2着シベリア産馬のクレテ（勝鞍初日第7レースと3日目第7レース）、さらに半馬身差の3着シベリア産馬のズベズタボストク（勝鞍4日目第7レース）、3頭のハンデは、160斤（約72.6kg）、122斤（約55.4kg）、134斤（約60.8kg）。このハンデ差を考えればスイテンの強さが際立っていた。スイテンは、確認できる初日第3レース、3日目第3レース、4日目第3レース（3レースともに日本調教馬限定）に続く4連勝だった。スイテンは、安田伊左衛門の名義。

ついで第8レース各競馬会抽籤豪州産馬およびロシア産馬優勝ハンデキャップ競走、1マイル4分1、1着500ルーブルはバンリ。勝時計2分12秒50、頭差の2着ロシア産馬のレリーサンドライゼム（勝鞍3日目第6レース）、3着グレンライト、3頭のハンデは140斤（約63.6kg）、134斤（約60.8kg）、135斤（約61.3kg）。バンリは、日本レース倶楽部（根岸競馬場）明治41年秋季抽籤馬、同開催は未勝利に終わったが、この5月の日本レース倶楽部春季開催で初勝利をあげ、6月の日本競馬会春季開催の優勝戦を制しての遠征、山梨の素封家で多くの活躍馬を所有した東京ジョッキー倶楽部の理事楨田吉一郎、仮定名称ナンチョウの名義。この開催、3日目第8レースを勝っていた。3着のグレンラ

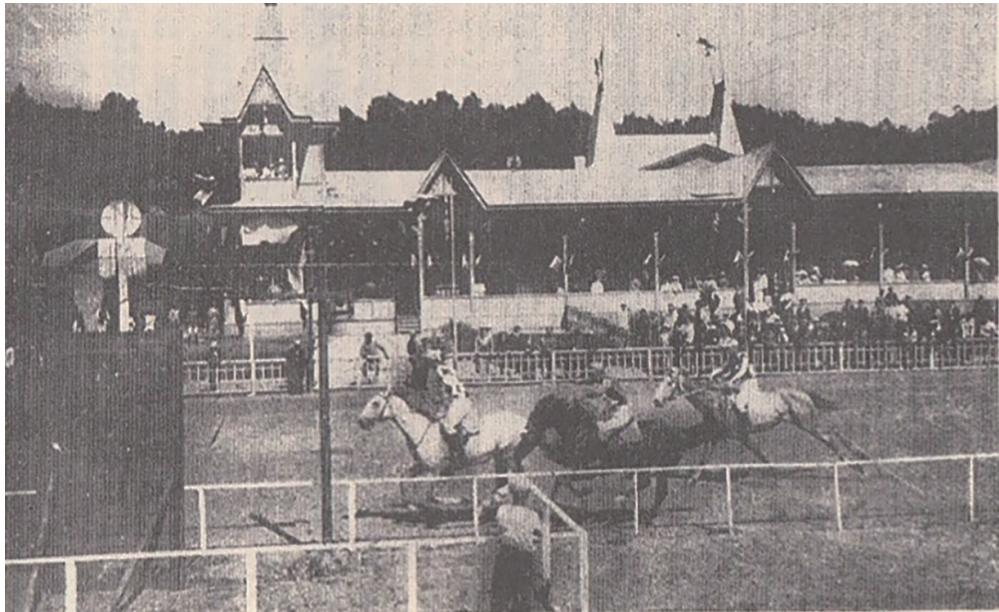


図2. 「浦塩競馬のスイテン」『日本之産馬』第3巻第7号（大正2年7月5日）。おそらく6日目第7レース各日本産馬およびシベリア産馬優勝ハンデキャップ競走のゴール写真。

イトは、シー・ダウンの名義、関西競馬倶楽部明治41年秋季抽籤馬、開催初日新馬戦をデビュー勝ち、4日目優勝戦は3着という戦績だった¹⁵⁾。

第9レース各産馬優勝ハンデキャップ競走、1マイル4分1、1着650ルーブルには、明治41年日本レース倶楽部秋季開催に向けて輸入され、強さを發揮したアメリカ産サラブレッドのトニック、トライムファントも出走していたはずだが、この2頭よりは力の劣るプリンスチャーレーが制した。プリンスチャーレーは、シー・ダウンが明治41年秋のシーズンに向けてオーストラリアから輸入したサラ系の牡馬、日本レース倶楽部明治41年秋季開催では、上記のアメリカ産のサラブレッドに歯が立たず未勝利に終わっていた。プリンスチャーレーはグレンライトとともに、この5月ウラジオストクに遠征してきていて、当地の春季開催に出走、3日目にプリンスチャーレーは対戦馬が回避して単走、グレンライトは勝鞍をあげていた。

日本調教馬とロシア調教馬の混合レースで結果が判明するのは5日間23、内日本調教馬は3つの優勝戦を含めて13レースを制した。だが、日本調教馬の力が上回っていたとは必ずしもいえなかったようである。というのは22、23日、「日露混合競馬会」として、事実上の7日目、8日目が行われたが、それまでの6日間出走しなかった「露国馬匹」が登場、その「露国馬匹は良種にして該二回に於ける成績は稍々優勢を示した」からである¹⁶⁾。この2日間は無料入場券1,000枚を配布、馬券売行高は好成績を示したという。

ちなみに騎手の騎乗に関して、ウラジオストクを訪れていた京浜競馬倶楽部理事で衆議院議員佐々木文一は、日本の一流騎手が騎乗したので、「最も卓抜なる技倅を發揮し得たるは痛快なり」と語ったが¹⁷⁾、これに対しウラジオストク領事館補花岡止郎は「本邦騎手が競馬に際し外国騎手に比して猥りに鞭を用ゆるは専門家に於て賞する能はざる処なりと云う」とその報告のなかで鞭を多用する騎乗ぶりを批判していた¹⁸⁾。この開催に騎手として参加した二本柳省三（後に日本中央競馬会調教師）は30年後の回想で、二本柳が「9勝し一番の好成績、2位はコフェー（オーストラリアから来日して活躍した騎手）の7勝、坪内（元三郎）さんは5勝して3位だったと記憶している」と語っている¹⁹⁾。

入場券売上高は6,500ルーブル²⁰⁾、これが仮に6日

間全員1ルーブルの2等入場者とすれば、有料入場者は6,500人、1日当たり1,083人。馬券は、ロシア人の購入割合は2~3割で、日本人同士の「食い合い」の様相を呈し、「財布の底をはたき」、為替で金を取り寄せるものがでる一方で、先にもふれたように渡航者の3分1が帰国し、4日目からは売上はぐっと減ったという²¹⁾。結局、馬券売上は、番外の2日間を別にして、6日間で35万ルーブル、あるいは50万ルーブルだったようである。明治41年春のシーズン、東京競馬会、東京ジョッキー倶楽部、鳴尾速歩競馬会が4日間で200万円以上を売り上げた馬券黙許時代と比較すれば、はるかに少なかった。とはいえる人口約7万の札幌市に存在する北海道競馬会の明治41年6月開催が4日間で約18万円（単純に6日間換算すると27万円）、ちなみに北海道競馬会の売上は、馬券を発売した14の競馬会のなかでは、1万円にも及ばず断トツの最下位である宮崎競馬会につぐブービーであった、その北海道競馬会を上回る額ではあった。ウラジオストクの人口は9万人²²⁾。それを考えると健闘した数字だったとはいえるが、ウラジオストク側にしてみれば期待外れのものだったに違いなかった。

註

- 1) 『日本競馬史』卷2、日本中央競馬会、昭和42年、84頁、「露人と日本人 浦塙競馬通信」『大阪時事新報』明治42年9月22日。
- 2) 「露人と日本人 浦塙競馬通信」『大阪時事新報』明治42年9月22日、「佐々木文一談 日露合同浦塙競馬雑観」『時事新報』明治42年9月27日。當時、鳴尾には関西競馬倶楽部と鳴尾速歩競馬会の二つの競馬場が隣接していたが、どちらの競馬場を指しているのかは不明。
- 3) 以下、馬券、控除率に関しては、特に記さない限り、「空前壯挙日露大競馬」『東京朝日新聞』明治42年7月13日、明治42年8月25日付在浦潮領事館事務代理領事館補花岡止郎から外務大臣伯爵小村寿郎宛「浦潮競馬会に関し続報の件」『浦潮に於ける競馬会開設関係雑纂』外務省外交史料館蔵、「露人と日本人 浦塙競馬通信」『大阪時事新報』明治42年9月22日。
- 4) 前掲明治42年8月25日付在浦潮領事館事務代理領事館補花岡止郎より外務大臣伯爵小村寿太郎宛「浦潮競馬会に関し続報の件」。
- 5) 安田伊左衛門『競馬夜話』長森貞夫編『東京競馬会及東京競馬倶楽部史』第1巻、東京競馬倶楽部、昭和16年、所収、523頁。
- 6) 外国為替相場」<https://coin-walk.site/J062.htm>、2023年4

月 16 日閲覧。

- 7) 「鳥港競馬と横浜」『横浜貿易新報』明治 42 年 6 月 15 日, 前掲『日本競馬史』卷 2, 84 頁。
- 8) 以下, 初日に関しては, 「浦塩競馬初日 (5 日午後浦塩発)」『万朝報』明治 42 年 9 月 6 日, 「日露合同大競馬 (初日) 非常の好景況 日本馬の大勝」『時事新報』明治 42 年 9 月 12 日, 「浦塩の競馬 日本産馬の優勝▲露国人の鑑定眼▲未曾有の大番狂わせ」『大阪時事新報』明治 42 年 9 月 12 日, 「日本馬の大勝利」『国民新聞』明治 42 年 9 月 13 日。
- 9) 「日露合同浦塩競馬雑観 日本は馬劣り騎手優る 渡航者は殆ど皆失敗 浦塩に 6 万円の置土産」『時事新報』明治 42 年 9 月 27 日。
- 10) 以下, 3 日目に関しては, 「浦塩の競馬 (12 日発)」『報知新聞』明治 42 年 9 月 13 日夕刊, 「浦潮特電」『神戸新聞』明治 42 年 9 月 14 日。
- 11) 「露人と日本人 浦塩競馬通信」『大阪時事新報』明治 42 年 9 月 22 日。
- 12) 以下, 4 日目に関しては, 「鳥港競馬第四日目 (15 日発)」『報知新聞』明治 42 年 9 月 16 日夕刊, 「浦塩競馬会 (第 4 日目)」『東京二六新聞』明治 42 年 9 月 17 日。
- 13) 以下, 5 日目に関しては, 「5 日目の優勝馬」『大阪時事新報』明治 42 年 9 月 19 日, 「浦塩競馬 (18 日発)」『報知新聞』明治 42 年 9 月 19 日夕刊, 「浦塩電報 (18 日)」『神戸又新日報』明治 42 年 9 月 20 日。
- 14) 以下, 6 日目に関しては, 「6 日目の競馬会 (20 日発)」『報知新聞』明治 42 年 9 月 20 日夕刊, 「浦塩電報 (18 日)」『神戸又新日報』明治 42 年 9 月 20 日, 「鳥港電報 (19 日発) 競馬会閉づ」『大阪朝日新聞』明治 42 年 9 月 20 日, 前掲『日本競馬史』卷 2, 87 頁。
- 15) 「師走の競馬」『神戸又新日報』明治 41 年 12 月 11 日, 「競馬最終日」『神戸又新日報』明治 41 年 12 月 14 日。
- 16) 以下, この臨時競馬会に関しては, 明治 42 年 9 月 27 日付在浦潮領事館事務代理領事館補花岡止郎より外務大臣伯爵小村寿太郎宛「浦潮競馬会に干し報告の件」『浦潮に於ける競馬会開設関係雑纂』外務省外交史料館蔵。
- 17) 「日露合同浦塩競馬雑観 日本は馬劣り騎手優る 渡航者は殆ど皆失敗 浦塩に六万円の置土産」『時事新報』明治 42 年 9 月 27 日。
- 18) 前掲明治 42 年 9 月 27 日付在浦潮領事館事務代理領事館補花岡止郎より外務大臣伯爵小村寿太郎宛「浦潮競馬会に干し報告の件」。
- 19) 二本柳省三「ウラジオ遠征」『優駿』第 2 卷第 3 号, 昭和 17 年 3 月。
- 20) 馬券売上も含めて, 前掲明治 42 年 9 月 27 日付在浦潮領事館事務代理領事官補花岡止郎より外務大臣伯爵小村寿太郎宛「浦潮競馬会に干し報告の件」。
- 21) 「置土産一五万円」『万朝報』明治 42 年 9 月 28 日。
- 22) 原暉之『ウラジオストク物語』三省堂, 1998 年, 280 頁。

会員通信

日本の競馬広告史

尾上綾那



尾上綾那（おのうえ あやな）

近畿大学経営学部学生センター勤務。修士（商学）。近畿大学大学院商学研究科博士前期課程主席修了。日本広告学会会員。

最大収容人数日本一のスポーツ会場である東京競馬場は、毎週末、多くの競馬ファンで埋め尽くされます。さらに全国の競馬場、テレビ・ラジオ・ネット中継の視聴者を含めると、競馬は見るスポーツとして最大規模です。ここまで発展した日本の競馬は、いつからどのように告知されてきたのでしょうか。本稿では、日本の競馬広告の歴史を施行者ごとに紐解いていきます。

1. 居留地競馬

横浜の居留外国人によって始められた競馬は、近代競馬初の開催記録として英字新聞『The Japan Herald』に掲載された1862年5月1, 2日のレーシングプログラムが有名です。しかし、これは告知記事として4月26日に掲載されたものであり、厳密にいうと競馬の広告ではありません。

告知記事とは、企業がマスメディアに情報を提供し、無料で記事にしてもらうパブリシティという広報活動です。一方、広告は広告主が有料の媒体で宣伝するプロモーション活動です。本稿でいう競馬の広告とは、後者の競馬施行者による広告活動および広告制作物を指します。

さきほどの英字新聞の告知記事は、日本語に翻訳されたチラシがあり（村井文彦 [1998] 「馬とたずねるむかしむかし」『競走馬』日本中央競馬会 第4号 P.21 図版）、「にほんのひとびとも、こころざしあるものハ、…きたりきそふべし」と日本人に向けて呼びかけられています。その後の居留地競馬の秋季開催や1865年英國駐屯軍競馬でも、相変わらず告知記事として掲載されていることから、居留外国人にとって息抜きやスポーツであった競馬を広告するのではなく、情報を提供することで日本人と良好な信頼関係を築こうとしていたのかもしれません。

日本の新聞で初めて広告を掲載した『萬國新聞紙』



図1. (右, 馬)『萬國新聞紙』第5集 慶應3年6月中旬 P.338, (右中, 獣医師)『復刻版横浜毎日新聞』第21巻 2184号 明治11年3月12日 P.220 (添付の図は、同年3月15日 P.232) (左2点, 乗合馬車)『萬國新聞紙』第15集 明治2年2月下旬 P.438

に競馬の広告は見当たらず、1867年に馬、1869年に乗合馬車、1878年に獣医師の広告が初めて新聞に掲載されました（図1）。

そして競馬の広告よりも先に競馬欄が1871年1月20日の『横濱毎日新聞』に登場しました（図2左、右上）。当時は単語としての“広告”ではなく“布告”や“告示”などの用語が使われていたため、同開催が翌月25日には布告欄となって告知されています（図2右下）。

それから1872年の『横濱毎日新聞』に“広告”という用語が初めて登場し、広告欄が作られると、その広告欄に競馬が登場するのは、1876年10月23日が最初です（図3）。これが日本の新聞紙上、初めて競馬が広告されたものであり、日本の競馬広告は近代競馬が始まって14年後に誕生しました。

2. 競馬俱楽部

日清・日露戦争後、馬の資質改良を目的として政府が馬券を默認した1905年から1908年の間、15の競馬

図2. (左, 右上) 不二出版『復刻版横浜毎日新聞』第1巻 29号 P.5, (右下) 同書 第1巻 62号 P.9

施行団体が設立され（1910年に11の競馬俱楽部へ改組合併），それぞれが独自に新聞，競馬雑誌，ポスターを主な媒体として広告を展開しました。その特徴は，競馬場までの路線案内，周辺の観光地や宿泊施設など，レース以外の情報が書かれ始めたことです（図4左，右）。

また，2つの競馬俱楽部が阪神地区の鳴尾に設立された理由は「鳴尾が大阪と神戸の二大都市の中間に位置すること，阪神電車の開通で多くの来場が見込まれること，砂地地質で競馬場建設に適していること」（鳴尾村誌編纂委員会 [2005] 『鳴尾村誌 1889-1951』西宮市鳴尾区有財産管理委員会 P.258）したことからも，競馬のターゲットが居留外国人から，より多くの日本人を集客しようとした変化が読み取れます。

そして，1923年に日本初の競馬法が制定されると，どの競馬俱楽部も広告で「政府公認の馬券発売」を強調しました（図4中）。

3. 日本競馬会

1936年に11の競馬俱楽部が日本競馬会へ統合され，翌年から日中戦争，太平洋戦争に発展したことで，競馬の広告は支那事変軍馬祭ポスター（図5）のような

図3. 日本で最初の競馬の新聞広告。広告主は横濱競馬会。1876年10月23日から11月1日まで8日間掲載された（10月29日は除く）。不二出版『復刻版横浜毎日新聞』第17巻 1773号 P.76

図4. (左, 中) 馬之友社 (1927) 『馬の友』, (右) 同書 (1930)

軍馬をイメージさせる表現に変わりました。広告コピーも同様に，1942年に馬政局・日本競馬会が制作した中吊りポスター「馬強ければ國強し 驛・車内をきれいにしませう」（昭和館 [2011] 『世情を映す昭和のポスター』 メディア・パル P.69）のように戦意高揚のスローガンを掲げ始めました。

当時の広告は，資生堂意匠部の山名文夫氏の著書によると「全国の宣伝技術者は，国策宣伝の兵隊となつて各職域の任務を果たさなければならなかつた」ことから，広告全般が国家総動員法によって献納広告に取つて代わられた背景があります。

16



図5. 支那軍變事馬祭ポスター。1938年から毎年10月24日に軍馬を慰靈するため、日比谷公園を中心に全国一斉で開催された。『北海道を中心とする戦前馬政史関連写真帖』第3巻。北海道大学スラブ研究センター特別保管

競馬の広告も、宣伝美術家でありながら戦時ポスター「撃ちてし止まむ」(大政翼賛会・日本宣伝協会制作、5万枚配布)で有名になった岸信男によって、絵画のように美しい競馬のポスターが制作されています(図6)。

また、終戦の翌年に再開された東京競馬の開催を支えたものは、出馬表の裏面に印刷された一般広告であったことも忘れてはなりません。

4. 国営競馬

1948年に日本競馬会が解散し、競馬事業を国に移管させて発足した国営競馬は、競馬の根拠づけを軍馬育成から国民大衆に娯楽を提供し国益金とする社会奉仕へと変えました。

この変化は競馬の広告にも如実に表れ、キャッチフレーズは「明るく楽しい国営競馬」となり、広告の内容は「単なる日割周知の域を脱して逐次競馬のPR運動にまで及ぼし、競馬に対する社会的観念の啓蒙と大衆把握を重要な課題とした」(農林省東京競馬事務所『業務報告書』昭和23~26年度、JRA図書室所蔵)とあります。

当時の広告費の推移は、京都競馬のみで見ると537,958円(昭和23年度※2回開催のみ)、1,955,355円(昭和24年度)、1,220,624円(昭和25年度)、7,078,919円(昭和27年度)、5,963,738円(昭和28年度)

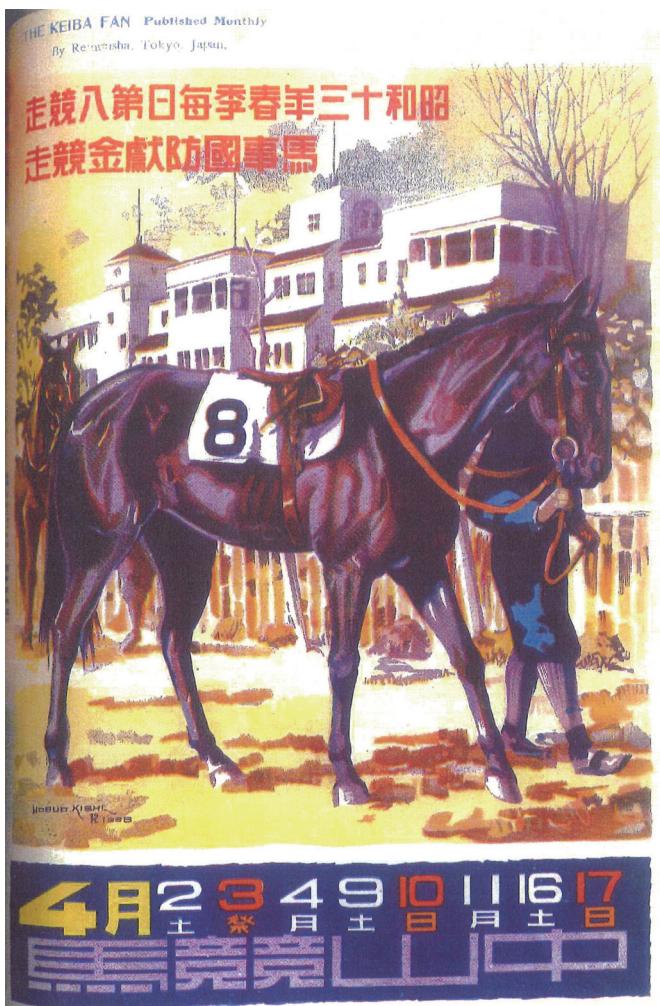


図6. 黎明社(1938)『競馬ファン』昭和13年3月号 裏表紙(馬の博物館より情報提供)

となっています(農林省京都競馬事務所『業務報告書』昭和23年度から昭和28年度より参照。昭和26年度のみ資料を見つけられず)。

また、広告媒体の種類も、「入場者の増加を図るために意を用い、広範囲に亘り、効果的にあらゆる方法をもって宣傳に努めた」(前掲書、昭和24年度)ことから、昭和23年度は9種(ポスター・新聞・雑誌・看板・広告塔・電車側面・マッチ・手帳・放送)だったものが、昭和28年度には20種(アドバルーン・宣伝車・横断幕・催物・日割カード・パンフレット・折込・仕掛け花火・ネオン・電光ニュース・電柱が新たに追加)に多様化しました。

広告の表現は、馬の博物館の伊丹徳行さん(ご所属は聴き取り当時)によると「国営競馬の開催告知ポス



図7. (上左, 下左2点) 馬の博物館所蔵「競馬レトロポスター展」展出作品(筆者撮影2017.2.18), (上右2点, 下右3点) JRA図書室所蔵農林省東京競馬事務所『業務報告書』昭和23~26年度付表18。

ターはいつ・どこで・何時からの3つの情報に加え、競馬を知らない方も含めた一人でも多くの方に認知されるように、色鮮やかな女性向けのイラストや競走馬の躍動感が伝わる表現がなされました。また、NATIONAL HORSE RACINGの英語表記も幾つか見られます。(図7)」とのことでした(2017年2月18日、馬の博物館「競馬レトロポスター展」展示室にて聴き取り)。

5. JRA日本中央競馬会

日本中央競馬会が設立された翌日の1954年9月17日、各紙朝刊に「御挨拶」と題された新聞広告が掲載されました(図8)。これが、日本中央競馬会の最初の新聞広告です。日本中央競馬会が広告主となって意識的に広報を始めた、私はここに日本の近代競馬の本格的な誕生を置くべきではないかと思っています。

設立当初は中央競馬の宣伝時代と区分される通り(日本中央競馬会『日本中央競馬会50年史』P.260)、開催を告知するだけの単純なものでした(図9左上、右上)。

“黄金の1960年”と呼ばれた余暇レジャーブームでは、1959年に起きた競輪の騒擾事件によって競馬も広

告を自粛していたため、文字だけでお知らせをする文章広告が多くなりました(図9左下)。

1970年代は、「桜」「菊薫る」「サラ」といったコピーでフィーリングに訴えるイメージ広告が現れます(図9右中、右下)。これは高度経済成長の歪みで生じた公害や環境汚染に対して、企業は社会的責任を求められ、広告は商品の品質訴求からイメージ訴求へ変わる過渡期にありました。競馬公害が呼ばれたのもこの頃で、広告の代わりにテレビ番組や新聞記事での露出が増えたことで、ハイセイコーの人気がより過熱したのはご周知の通りです。

1980年代は、現在のJRAの広報活動に繋がる基盤の時期です。1983年からイメージキャラクターを起用し、ターゲットを女性と若年層にして、年間を通してトータルキャンペーンが展開されました。当時はコーポレート・アイデンティティ(CI)として企业文化を視覚化させる風潮があり、日本中央競馬会も1986年からJRAという略称、グリーンのコーポレートカラー、ロゴマークは工業デザインの巨匠である栄久庵憲司さんによって設定され、イメージアップが図られました(図10)。



図 8. 日本中央競馬会の最初の新聞広告。『読売新聞』1954年9月17日朝刊（『朝日新聞』『毎日新聞』にも同日掲載）

この頃の印象的な広告の一つに、チャールズ皇太子殿下（当時）とダイアナ妃殿下の初来日に合わせて出稿された『サラブレッドを、ありがとう。』という新聞広告があります。向かいあう両殿下とその後ろにたたずむ馬の描写には、以下のコピーが添えられています。

「より速く、より強く…」人の遙かな夢を託し、300年もの歳月をかけて完成したサラブレッド。その雄姿は、数限りないロマンを演じてくれました。まさに、英国が生んだ偉大なる芸術です。サラブレッドを、そして乗馬を愛される両殿下のご来日は、わたしたちにとってなによりうれしい朗報です。心よりご歓迎申しあげるとともに、日本中央競馬会が両国を結ぶ力強い絆となるよう、そして素敵な馬文化の継承役となるよう頑張りたいと考えています。日本と英国の、ロマンの絆——日本中央競馬会です。ようこそ、チャールズ皇太子殿下、ようこそ、ダイアナ妃殿下。」（『読売新聞』1986年5月5日朝刊）

1990年代は、高倉健さん、いかりや長介さん、賀来千香子さん、柳葉敏郎さん、真田広之さん、中井貴一さん、时任三郎さん、本木雅弘さん、鶴田真由さんなど数多くの有名人が競馬広告に登場します。私は、木村拓哉さんが1999年『走れ、JRA』シリーズで「GET YOUR DREAM」という日本グローバルのテレビCMが大好きで、大学で広告を専攻しました。この年間キャンペーンを含め、JRAの広告は数多くの広告賞を受賞しています（図11）。

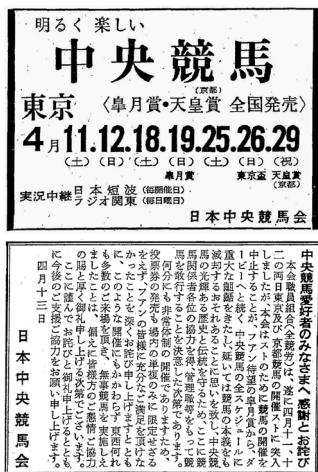


図 9. (左上, 左下)『読売新聞』1964年4月4日, 4月13日, (右上)同紙1966年11月3日, (右中, 右下)同紙1971年3月25日, 11月4日



図 10. (左)日本馬主協会連合会（2001）『日本馬主協会連合会40年史』P.103, (右)日本中央競馬会広報部（2005）『中央競馬のすべて』

2000年代は、2000年『最後の10完歩』, 2001年『祭り』, 2003年『競馬に逢えて、よかったです』でJRAの企業ブランド広告が始まりました。これ以降のテレビCMでは、JRAの企業ブランド広告と週末のレースを告知するプロモーション広告、この二つを並行させた広告展開が基本になっていると考えています。

そして近年の競馬広告は、交通広告、屋外広告、デジタルサイネージ（電子看板）の総称であるデジタル・アウト・オブ・ホーム（DOOH）広告による駅や電車内のメディアジャック、ポータルサイトのバナーを使ったインターネット広告、SNSを利用したJRA公式

受賞年	広告賞	作品名	媒体	広告会社	制作会社
1977 (昭和 52) 年	クリオ賞ファイナリスト	血統篇	テレビ CF	—	—
1978 (昭和 53) 年	東京コピーライターズクラブ TCC 新人賞 コピーライター 柿本照夫	ゴミ公害排除／ 負けたわたしが悪いのですが、 どうかハズレ馬券はゴミ箱へ。	ポスター	マッキアン・エリクソン博報堂	中沢製版印刷
1978 (昭和 53) 年	クリオ賞ファイナリスト	ダービー編	テレビ CF	—	—
1979 (昭和 54) 年	クリオ賞ファイナリスト 国際放送広告 IBA 賞ファイナリスト	歴史篇	テレビ CF	—	—
1980 (昭和 55) 年	第 25 回秀作車内ポスター展ベストテン第 2 位	シンザンを超えろ	ポスター	—	—
1981 (昭和 56) 年	第 26 回秀作車内ポスター展優秀賞	大地に名を刻め 君は思い出のなかを走り続ける	ポスター	—	—
1982 (昭和 57) 年	全日本シーエム放送連盟主催 第 22 回 ACC CM FESTIVAL 秀作賞	企業広告／サラブレッド	テレビ CM (60 秒)	博報堂	ニッポンムービー
1986 (昭和 61) 年	第 26 回 ACC 賞優秀賞	企業広告／ニューマーケット '86	テレビ CM (60 秒)	博報堂	ニッポンムービー
1989 (昭和 64) 年	第 29 回 ACC 賞特別賞	企業広告／ある馬の引退式	テレビ CM (60 秒)	博報堂	プロシード
1991 (平成 3) 年	第 31 回 ACC 賞特別賞	企業広告／競馬の友	テレビ CM (60 秒)	博報堂	プロシード
1992 (平成 4) 年	第 32 回 ACC 賞優秀賞	JRA'92 日本ダービー	テレビ CM (15 秒)	博報堂	プロシード
1993 (平成 5) 年	ジェイアール東日本企画主催 第 5 回 JR 東日本ポスター賞 車内ポスター部門 銅賞	あなたと話したい競馬があります。 馬と話がしたいなあ。	ポスター	博報堂	博報堂
1995 (平成 7) 年	第 48 回広告電通賞 新聞・教養娯楽部門 優秀作品賞	秋のレース告知 シカに見えた人は、奈良へ。 ウマに見えた人は、京都へ。	ポスター 新聞広告 (15 段)	電通関西支社	中野直樹広告事務所
1996 (平成 8) 年	第 36 回 ACC 賞秀作賞	レース告知／親父の好きな馬	テレビ CM (30 秒)	電通	シーエム・アイズ
1999 (平成 11) 年	第 39 回 ACC 賞テレビ CM 部門金賞	99' 年間キャンペーン／光る夢	テレビ CM (30 秒)	電通	TUGBOAT、東北新社
2000 (平成 12) 年	第 40 回 IBA 入選 CM 集ファイナリスト 実写非英語 60 秒以上 (米国外) 日本	99' 年間キャンペーン／ 名馬 Junior (英語スーパー入り)	テレビ CM (50 秒)	電通	TUGBOAT、東北新社
2004 (平成 16) 年	第 53 回朝日広告賞 エンターテインメント部門賞	JRA 創立 50 周年記念／ 半世紀という、 わずかな時間のあいだに。	新聞広告 (30 段)	電通	電通
2007 (平成 19) 年	第 50 回日本雑誌広告賞 第 5 部 (特殊加工広告) 銀賞	有馬記念	雑誌広告 (TOKYO1 週間)	電通	電通
2010 (平成 22) 年	第 50 回 ACC 北海道地域ファイナリスト	JRA 函館競馬開幕篇	テレビ CM (15 秒)	北海道博報堂	REACTOR
2011 (平成 23) 年	第 64 回広告電通賞 インターネット広告賞 (キャンペーンサイト部門)	財団法人全国競馬・畜産振興会 JAPAN WORLD CUP	インターネット	東急エージェンシー	Katamar、AID-DCC、 IDIOTS、MAGIMAX、 ジーニーズ、テトテ、 バードランド
2013 (平成 25) 年	第 53 回 ACC 賞ファイナリスト	CLUB KEIBA 2011 「はじめての競馬場」篇	テレビ CM (30 秒)	電通	電通クリエーティブ X
2013 (平成 25) 年	第 62 回朝日広告賞 朝日新聞特別賞	〈有馬記念〉を告知する新聞広告 8 点シリーズ	新聞広告 (15 段)	電通 朝日新聞社	ドリームエッジ ラビット、アドレイ、 朝日新聞社

図 11. 競馬広告の広告賞受賞作品の一部 (筆者独自調べ) ※ーは不明

Facebook ページや Instagram、YouTube の JRA チャンネルなど、さまざまな媒体を組み合わせた統合的な展開によって、競馬広告の概念に広がりを見せていることが特徴です。

6. まとめ

日本の競馬広告の歴史を振り返ると、近代競馬の基本的な構造は変わっていませんが、私たちの社会における競馬の位置づけは大きく変わりました。これは日本の競馬が、特に JRA が広告を戦略的に活用して、時代にあわせた競馬の楽しみ方を提案してきた成果です。競馬広告には、馬券の販売を促進する経済的機能と、

賭け事だけではない新しい視点を競馬に与える社会的機能（例えば、生活情報やライフスタイルの提案、夢やロマンの描写、動物愛の醸成、競馬に人生の投影など）があります。

これからの競馬広告には、新しい時代とともに、新しい社会的機能を期待したいです。

謝辞 本稿には多くの広告作品を掲載させて頂きました。JRA 広報部、JRA 図書室、馬の博物館、広告関係者の皆様、近畿大学中央図書館・経営学部、そして日本ウマ科学会の先生方に心より御礼申し上げます。

❶ フォトアルバム

日高・浦河 ある牧場の記憶帖

写真 富菜千年雄

構成 関 正喜

競馬の世界では大規模化・法人化した牧場の生産馬の活躍が目立つ。一方で、浮き沈みの激しい世界で堅実な経営を守り、親から子へと引き継がれてきた牧場もなお少なくない。それぞれの牧場にファミリー・ストーリーがある。そうした牧場のひとつ、北海道浦河郡浦河町の富菜牧場に残されている 1980~90 年代の写真をミニ・アルバムとして構成してみた。撮影者は故富菜千年雄さん(1924~2001)。牧場主であると同時に地元写真サークルの会長も務めた。今はスマホで高精度の写真を簡単に撮影できる時代だが、千年雄さんがキヤノンのフィルム・カメラでシャッター・チャンスを狙い、自ら現像しプリントした一枚一枚からは、牧場の日々の息づかいが伝わってくる。



(中山競馬場にて富菜千年雄さん。
撮影日時不詳)



富菜勝美さんによると 1985 年ごろの作品。夫人の佳美さんは「家の二階におじいちゃんの暗室があり、定着液の酢酸臭がすごかった」ことをよく覚えているそうだ。85 年の生産馬は 5 頭。そのうちの 1 頭に中央競馬の平地競走と障害競走で計 4 勝したミルフォードミドリがいる。仔馬は彼女かもしれない。

富菜(とみな)牧場=北海道浦河郡浦河町杵臼 畑作農家であったところ、1962 年ごろから軽種馬生産を手がけるようになった。当初はアングロアラブ生産のみだったが徐々にサラブレッドに切り替え現在に至る。日本軽種馬協会への登録は、84 年生産馬までは「富菜千年雄」名義、85 年からは「富菜牧場」(富菜勝美代表)名義。代表的な生産馬にスキップジャック(2004 年京王杯 2 歳ステークス)、クーヴェルチュール(2007 年キーンランドカップ)など。クーヴェルチュールは引退名馬繁養展示事業の対象馬として、富菜牧場で繁養されている。2023 年の繁養繁殖牝馬 7 頭という個人経営牧場だが、「X(旧ツイッター)」発信がフォロワー 35,000 にのぼる。

掲載写真を撮影した富菜千年雄さんから牧場を継いだ勝美さんの話によると、千年雄さんは 40 歳のころまで浦河の草競馬に騎手として出場していたというので、アングロアラブ生産を始める以前から馬には親しんでいたのだろう。趣味の写真が本格化したのは牧場経営を勝美さんに移譲した前後から。フィルムによるモノクロ写真が中心で自ら自宅の暗室で現像・プリントを行い、町内のアマチュア写真愛好家による「フォト浦河」の会長も務めた。残念ながら作品の多くが失われているが、本ページの企画者(本誌編集委員・関正喜)は北海道新聞記者時代、日高の個人牧場の情景を内側から捉えた魅力的な作品を多く拝見し、軽種馬生産に関する連載記事(1997 年)のカット写真に使用させていただいたことがある。



冬の牧場。北海道の中では比較的温暖な気候で知られる日高地方だが、海岸線から数キロ内陸に入るだけで氷点下10度を下回ることが珍しくない。上下2枚はいずれも撮影年の記録がないが、上が1983～4年ごろ、下はカラーなので80年代後半ではないかという。下のカラー写真は退色が進んでしまったオリジナルの美しさとほど遠いが（富菜勝美さんの了解を得て色味を多少修正した）、富菜千年雄さんには朝靄の中の馬たちをとらえた幻想的な作品が何点かあった。



このカラー写真（サイズは八つ切り）の撮影年は不明。1980年代終わりか90年代初めごろの夏の日の牧場の一コマといった趣きだが、浦河町杵臼地区でこれほど雲が下がっている気象は珍しいかもしれない。富菜牧場は旧日高軽種馬農協浦河種馬所にも近い。同種馬所には当時、トウショウボーアイが飼養されていた。



パネル化され富菜家で長く愛されている1995～6年ごろの写真。生まれたばかりの仔馬を心配そうに見守っている犬はロックという名前で、馬のお産には毎回必ず立ち会うばかりでなく、仔馬の面倒見がとても良い犬だったそうだ。富菜牧場には常に犬がいて、現在はハギオが「X（旧ツイッター）」で人気者になっている。



1993年の作品で、写っている赤ちゃんが富菜勝美さんの長女綾乃さん、馬はドサンコのカスミ。綾乃さんは2か月になるかならないかのころから自分から馬に触れていたそうで「カスミに噛みつかれて泣き出してもまた近づいていった」（佳美さん）という。小学生の頃から「牧場は私が継ぐ」と宣言し、その通り農業高校から大手牧場での修業を経て、現在は三代目を継ぐべく頼もしい働き手として富菜牧場に戻っている。



写真愛好家としての富菜千年雄さんの撮影テーマは主に牧場の馬だったが、綾乃さんが生まれてからは徐々に孫へと被写体が移っていった。上の3枚は2000年の作品で、組写真として浦河町の文化祭に出展されたらしい。こちらの女の子は富菜勝美さんの次女の美咲さん。当時牧場にはタケショウティアラという繁殖牝馬がいた。「当時のウチはめちゃくちゃ忙しい時。美咲は悲しいとき、いつも厩舎にいてティアラに抱きついて慰めてもらっていたと、後になって聞きました」（佳美さん）。心優しいタケショウティアラの血統からは2020年の淀短距離ステークスを勝ったアイラブテーラーはじめ何頭もの中央競馬勝ち馬が出ている。

臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習のDVDを販売しています。

＜お申し込み方法＞

以下の申込用紙をご利用いただくな、メールで事務局までお申し込みください。

＜価格および代金のお支払い方法＞

価格は1セット3,000円です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行（9900）〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカカクカイ）

----- キリトリセン -----

申込用紙

ご希望のDVDと枚数	(1) 2009年（第22回学術集会） Dr. Brooks	眼科	() セット
	(2) 2010年（第23回学術集会） Dr. Richardson	整形外科	() セット
	(3) 2011年（第24回学術集会） Dr. LeBlanc	繁殖	() セット
	(4) 2012年（第25回学術集会） Dr. Dyson	跛行診断	() セット
	(5) 2013年（第26回学術集会） Dr. White	急性腹症	() セット
	(6) 2014年（第27回学術集会） Dr. Scott	装蹄	() セット
	(7) 2015年 Dr. Mama & Steffey	麻酔	() セット
	(8) 2016年（第29回学術集会） Dr. Ducharme	呼吸器	() セット
	(9) 2017年（第30回学術集会） Dr. Hyde	歯科	() セット
	お名前		
ご送付先住所			
ご所属			
電話番号			
メールアドレス			

連絡先：日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676 e-mail：e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4 JRA競走馬総合研究所

協賛団体名

団体名	〒	住所
日本中央競馬会	105-0003	東京都港区西新橋1-1-1
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台2-2-1 麻布台ビル

賛助会員名簿

(五十音順)

会員名	〒	住所
(株)アイペック	170-0002	東京都豊島区巣鴨1-24-12 アーバンポイント巣鴨4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	057-0171	北海道浦河郡浦河町西舎528
公益財団法人 競走馬理化学研究所	320-0851	栃木県宇都宮市鶴田町1731-2
JRA システムサービス(株)	135-0034	東京都江東区永代1-14-5 永代ダイヤビル7F
JRA ファシリティーズ(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀3-19-9 ジオ八丁堀
公益財団法人 ジャパン・スタッフ・ブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋4-5-4 日本中央競馬会新橋分館6F
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会	105-0004	東京都港区新橋4-5-4 日本中央競馬会新橋分館3F
公益社団法人 全国乗馬俱楽部振興協会	105-0004	東京都港区新橋4-5-4 日本中央競馬会新橋分館5F
ゾエティス・ジャパン(株)	151-0053	東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル14階
中央競馬馬主相互会	105-0004	東京都港区新橋4-7-26 東洋海事ビル3F
住友ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目5-7 メットライフ本町スクエア10F
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋4-5-4 日本中央競馬会新橋分館3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	105-0004	東京都港区新橋4-5-4 日本中央競馬会新橋分館7F
一般財団法人 日本中央競馬会弘済会	105-0003	東京都港区西新橋1-1-1
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川2-6-16 馬事畜産会館7F
公益社団法人 日本馬術連盟	104-0033	東京都中央区新川2-6-16 馬事畜産会館6F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷2-27-18

Hippophile 投稿に関する基準

(2013年4月1日一部改定)

- ① 本誌の投稿は、Hippophile 投稿規程（以下「規程」という。）に基づくことを基本とする。
- ② この基準は、投稿者が投稿しやすいよう投稿分野ごとに細目を定めたものである。
- ③ 原稿を本誌の目的に沿ったものにするため、1～3名の審査員により審査を行い、事務局（（株）アイペック）を通じて投稿者と調整を行う。審査員の指摘を受けた投稿者は速やかに事務局に回答するものとする。その目的は、多種多様な本学会会員に対し、解りやすく美しい文章で、かつ投稿者の真意が正確に伝わる記事にすることにある。
- 編集委員（長）および審査員は、掲載の可否にあたっては、内容が特に営利目的でないもの、あるいは偏った個人批判、地域批判、団体批判を含まないものであることに留意する。
- ④ 本誌は、図表のカラー化を取り入れていることから、良好なピントや色彩を求める。
- ⑤ 本誌は、各号のページ数を刷上り約40ページとするため、投稿ページ数に制限を設ける。ただし、やむを得ない場合は、投稿者と協議のうえ、編集委員長がページ数を決定する。
- ⑥ 図は、写真を含めて図と称し、番号を付け、タイトルと説明文を付記することとする。その大きさは縦6.0cm×横8.5cmとするが、説明文のスペースの関係から図1枚につき縦約7cm取ることとする。ページ数の調整の関係で編集委員（長）の一任により図のサイズを決定することがある。
- ⑦ 投稿者は顔写真（カラー）と略歴（150字程度）を添付することとする。
- ⑧ 刷上り最大24字×42行×2段=2,016字の字数が1ページに印刷可能であり、これを目安に投稿することとする。
- ⑨ 図1枚の占めるスペースの字数は約168字となる。
- ⑩ 表にはタイトルと説明文のほか、必要に応じて注釈・解説文を添付することとし、表の大きさは、ページ数を考慮し、審査員と編集委員（長）が協議のうえ決定する。
- ⑪ 投稿者に原稿料（1ページにつき3千円）を支払う。ただし、原則として研究論文や施設紹介には支払わない。原稿料は、刷上りのページ数により算出し、ページ半分に満たない部分は切捨てとする。ただし、5ページ相当の原稿料（1万5千円）を上限とする。
- ⑫ 投稿者は、原稿内容により、以下の各コーナーの分類について要望又は指定することができる。

総説：

- 【ウマの科学的分野における研究の総括と展望】
- ① 文献展望を主体とし、刷上りは図表を含めて10ページ以内程度とする。

科学論文・一般学術論文：

- 【ウマ科学に貢献する未発表・他の学術誌に未掲載の和文論文】
- ① オリジナリティーの高いもの。

- ② 科学論文は、研究目的、材料・方法、成績・結果、考察、纏めが適切に記述されている自然科学の論文とする。
- ③ 一般学術論文は、自然科学に準ずるが、馬の文化、経済学、芸術、歴史などの人文科学の論文とする。
- ④ 刷上りのページ数は図表を含めて10～12ページ以内程度とする。
- ⑤ 引用文献の書き方はJESの投稿規程に準ずる。本文中のナンバーリングは上付きとし、引用文献順に掲載する。但し、著者名の記載は1名あるいは2名までとし、3名以上の場合には代表者1名を記載し「その他、あるいはet al.」として記載する。

馬事往来：

- 【馬との関わりについての提言、レポート、エッセイなど】
- ① 馬の文化や科学の実態を会員が相互に理解しておく必要性のあるもの。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

馬事資料：

- 【馬に関する資料の掲載】
- ① 日本の馬事資料として保存しておく必要性のある内容のものを掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

特別記事：

- 【馬に関する競技会やイベント、利用実態などの記事】
- ① 馬に関する各種催し物や活動状況などを紹介。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

馬事施設紹介：

- 【馬の文化・科学に関わる施設の紹介】
- ① 日本の馬事文化、研究、教育、乗馬等に関わる施設などの紹介記事。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

学術集会記事：

- 【馬に関する学術集会における講演内容等の掲載】
- ① 本学会の学術集会等を主体に掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

関連研究会記事、その他：

- ① 規程に準じて取り扱う。
- ② 刷上りのページ数は1～2ページとする。
- ③ いずれのコーナーにも該当しないものにあっては、編集委員長が新たにコーナーを設けることができる。

投稿原稿送付先

Hippophile 編集事務局宛にe-mailもしくは郵送でデータを送付のこと。（投稿された原稿は返却しませんので予めご了承ください。）

e-mail: hippo@ipec-pub.co.jp

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-12

（株）アイペック内 Hippophile 編集事務局

編集後記

東京・世田谷の馬事公苑が、本年（2023年）11月3日にリニューアルオープンをしました。東京オリンピック馬術大会は無観客で入苑することはできませんでした。そしてこのリニューアルオープン。7年ぶりの馬事公苑で目にする風景は、近隣のマンションはそのままですが、それ以外はすっかり様変わりしていました。広大な芝生のはらっぱ広場とメインアリーナの砂地の白さが心を浮き立たせます。国際的な馬術大会も開かれるそうですが、広場の芝生も悪くありません。

【学術論文】は藤原優美さんによるホースアシステッドセラピーの研究報告です。動物を介在させる療法は、多くの人に求められています。

【馬事往来】では、馬の大型絵画の作成と、同作品の英国への寄贈について、三宅洋子さんに寄稿をいただきました。画家は長瀬智之氏。日英間の馬を通じた文化交流の優れた営みが、制作と寄贈の流れを綴った文章から読み取れます。

【馬事資料】立川健治さんの日露競馬大会の連載ですが、マニアックな競馬ファンにはまたとない資料といえます。

【会員通信】には、尾上綾那さんから日本の競馬広告史について寄稿いただきました。居留地競馬時代から今日までの競馬広告史について図表とともにまとめていただきました。競馬広告が、馬券一辺倒から時代とともに変化していることがよくわかります。

【フォトアルバム】には北海道・浦河の富葉牧場の1980～90年代の写真を特集しました。撮影者は富葉千年雄さん。きれいな写真から、牧場の日常の姿がうかがわれます。

（編集委員長 楠瀬 良）

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円（国内）です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail : e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 95, 2023

2023年12月発行

<https://jses.jp>

編集委員長：楠瀬 良

発行者：青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900)〇一九（ゼロイチキュウ）店

当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマガクカイ）

印刷者：株式会社 アイペック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067